

2013年度鳴門市人権地域フォーラム

テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2013年8月9日(金)13:30～16:30

■ところ 鳴門うずしお会館

コーディネーター A(藍住町立藍住中学校教諭)

パネリスト B(愛媛県愛南町解放未来塾前塾長)

C(徳島県人権エンタメ集団『友輝』)

D(作家)

《司会者》

それでは、本日の人権地域フォーラムにお招きしました講師の方々をご紹介します。恐れ入りますが、講師の皆様は、お名前をお読みいたしますので、順次壇上の席へご移動くださいますようお願いいたします。

初めに、本日のフォーラムのコーディネーターを務めていただきます、藍住中学校教諭 Aさんです。(会場の拍手に迎えられながら、ゆっくりと壇上へ移動し席に着く)続きまして、パネリストの方々をご紹介します。パネリストは紹介されるたびに、拍手の中を落ち着いた様子で壇上に上がりそれぞれの席に着く)愛媛県愛南町解放未来塾前塾長 Bさんです。徳島県人権エンタメ集団友輝 Cさんです。作家 Dさんです。

本日は以上4名の講師の皆様と共に「『ひとつと』から『わがこと』へ～自己をみつめ語り人と人がつながる人権学習～」というテーマのもとにフォーラムを進めていただきます。なお、本日、『テレビ鳴門』の撮影が行われています。パネリストの語りと本日のフォーラムの1部を後日放映いたしますが、会場の皆様との意見交換につきましては撮影いたしませんので、ご了承くださいようお願いいたします。

それではA先生、後の進行につきましてはよろしくお願いいたします。

《コーディネーター A》

(いっばいの笑顔で元気よく)皆さんこんにちは。会場後ろの方。このくらいの声で聞こえますか?(笑顔で反応を待つ中で、後ろの席から聞こえるというサインが返る。そのやり取りに会場に明るい笑いが溢れる)聞こえましたか。(安心したように言葉をつなげる)今も教育長さんのご挨拶にもありましたが、差別の現実を自覚する場面が、日常的に今もあります。昨日、大変暑い中だったんですが、徳島北高校の体験入学がありました。800名を超える中学生が徳島北高校の体験入学に集まった時、体育館で、保護者も200名くらい集まっていたと思います。暑い中で話を聞いていました。徳島市内の学校から来た1人の保護者が、私のところに来て言いました。

(一言一言に精一杯の魂を込めるように)「A先生ですか?実は、板野中学校でお世話になった〇〇です。」と名前を名乗られました。「今、中学校3年生の息子がいます。やっと1週間前に、息子に同和問題の話ができました。中学生になって、息子の口から同和問題に関わって差別的な言葉がボロボロ出てくる。そのことが、苦しいてせつうてたまらんかった。いつ言おうかいつ言おうかと揺れて揺れてする中で、1週間前に話をすることができた。私のこと、私の家族のこと、そして、中学生時代に学んだことを一生懸命に伝えました。息子が一生懸命に聞いてくれました。話して良かったです。」その言葉にやっぱり力をもらいます。その保護者が、「今日、先生とこういう形で会えたのも、何か深い縁を感じます。」そんな言葉をくれます。これが現実なんだと思います。

(しみじみと)私が中学2年の時に、地区の子どもたちの学習会が始まりました。その学習会の会場で同級

生が私に話した言葉が、やっぱり、昨日のこのようによみがえります。私は名前がAですから、下の名前で同級生が呼びます。「Aちゃん、学校の先生にならんで？」と言います。「何でな」と問い返す私に、彼は、「わしな、この差別をなくすんは、学校の先生になるんが一番ええと思う。」と言いました。「何や、『この差別』って。」「Aちゃん、知らなかったんか。わしらは同和地区に生まれたことになっとるんやで。」彼とこんなやり取りがありました。

私は、その時に初めて、友だちのその言葉を通して自分が同和地区出身であるということを知りました。それは、私の人生にとって大きな大きな意味を持ちました。その時、小学校時代に地区外の友だちの家に行って切ない思いをした。「何なんだろう。これは」と思ったことがよみがえります。(力強く)でも、友だちを通し、一緒に差別をなくす仲間を通し、この問題を自覚できたよろこびや誇りは、私の人生においてやはり大きな意味を持ってきました。その友だちは今、高校の数学の教師になっています。私の一番の仲間です。

法が切れて、徳島で小さい頃から続いていた学習会が終わりました。どういう形で子どもたちは立場を自覚し、誇りを持って差別をなくしていく生き方をつかんでいくんだと思います。今、まさに人権教育のあり方が問われてきます。

(想いを切り替えるように)最初に、愛媛県の愛南町の解放未来塾という地区の子どもたちの学習会が9年前に始まりました。その解放未来塾で昨年度まで塾長をしていて、この春高校を卒業し、今、解放未来塾の指導者の立場にいる青年に話をしてもらいます。このフォーラムで初めて映像が使われました。(温かい笑顔で)7年前の解放未来塾の開講式の映像も流れると思います。彼女が小学校5年生の時の映像です。19歳と小学校5年生で大分ギャップがあると思います。映像が上手い具合にまわるかどうか私も心配ですけど、観てやってください。

彼女は、地域の方や先生方にこの場に連れて来てもらって、何度か会場から自分の思いを語ったことがあります。語り語りを生む。自らの語り自らを癒していく。そんな人権の学習が広がっていった中で、わがこととして自分を語るよろこびをつかんでいく。そんな人権学習が今年もつないでいけたらうれしいなと思います。それでは、Bさんに話をしてもらいます。皆さん、拍手をお願いします。(会場から大きな拍手)

《パネリスト B》

(恥ずかしそうに立ち上がりながらも、元気よく)愛媛の愛南町から来ました、Bです。私は、今年の3月まで解放未来塾で塾長をしていました。今日は、その未来塾が始まってからのことを説明したいと思います。よろしくお願いします。

解放未来塾の誕生

私たちの町には、同和問題をはじめとする、いろいろな人権問題について勉強している「解放未来塾」という子ども会があります。この解放未来塾は、平成17年4月、私が小学5年生になった時にできました。

開講式は、教育長さんをはじめ、各学校の校長先生や同和教育担当の先生や役場の方、そして保護者など、大勢の大人たちに囲まれて始まりました。

館長さんが、『あなたたちの言っていることはおかしいよ。どうして差別するの。』と言える勇気と知識を身につけていきましょう。』と言われ、小学校の先生からも、「地区外の周りの大人たちのことは、私たちに任せなさい。責任を持つ。今日は、君たちにとっての決意表明の日でもあり、私にとっての決意表明の日でもあります。」と心強い言葉もいただきました。

でも、その頃の私は、周りの大人が何のことを言っているのか全く分からなくて、今から何が始まるのか不安で一杯だったのを覚えています。今思えば、この日から少しずつ少しずつ私は変わっていったのだと思います。ここで、開講式の様子を見てもらおうと思います。

(2005年4月17日の解放未来塾開講式のDVDの映像が映し出される)

【高校生たちが次々に立ち上がりマイクを持って意思表示をしていく】

【高校生A】

私の目標は自分の意見をしっかり持つです。(拍手)

【高校生B】

高校3年生です。目標は、勉強面を頑張ることです。(拍手)

【高校生C】

高校3年生です。目標は勉強に参加することです。(拍手)

【大森文化会館館長】

私たちはなぜ、解放未来塾で学び、なぜ差別があるのかということを知る必要があるのか。ということになりますと、やはり「差別に気づく」「差別に負けない」「差別と闘える人間」そして、「他人の出会いを大事にできる人間」そして、「仲間がいっぱいいるんだということ認識し合って、そこに子どもたちの将来が拓けていくんだらうと思います。

【保護者】

解放未来塾で勉強していく上で、子どもたちに自分を考える自信を持って、そして差別に負けない勇気を持って、これからも保護者と一緒にやっていきたいと思っています。

【高校生D】

今まで少ししか学習できていないので、これからしっかり勉強していきたいと思っています。

【高校生E】

先生方、保護者の皆さん、一生懸命やりますのでいろいろ教えてください。これからよろしくお願いします。

【小学校教師】

(自分の顔を見つめ真剣に話を聞く3人の子どもたちに向かって、ゆっくりとしっかりと語りかけるように)解放未来塾の「解放」というのは、心の解放です。解き放たれることです。解き放たれるということは「心が楽になって幸せになる」ということです。もしかしたら、将来差別に出会うことがあるかもしれません。そのときに、「そんなことに出会うかもしれないなあ、私は。」という親御さんの少し不安な気持ちから解放する。そして、差別をしてしまっている人の心も、「それはおかしいと思うよ」と解放してあげる。それが解放未来塾の仕事だと思っています。

皆さんは今日がその1ページです。ここにファイルがあります。ここに皆さんの、周りへの解放の道筋を、いっぱい書きためていきましょう。(一人ひとりにファイルを手渡す。そのファイルをしっかりと受け取る子どもたちの方を押すように、後ろに集まった大人たちの方を向け、子どもたちの方をそっと叩きながら)差別があって、加差別と被差別があって、本当は君たちが一生懸命頑張る必要はない。頑張らんといけんのは周りの人間です。けども、皆さんもともに進まんといけん。

周りの人間が、差別を加えている周りの人間が、または、差別に気づいていない周りの人間が、それに気づいていなかったとしたら、その周りをどうにかしていくことについては、自分自身も含めて、僕ら先生たちに任せなさい。責任を持つ。頑張って支えますという人の集まりです。僕もその一人になります。

はい、こっちを向いてください。(子どもたちを自分の方を向けさせながら、真っ直ぐに自分を見つめる子どもたちに向かって)今日は、君らの決意表明であると共に、僕、Iの決意表明の日でもあります。共に進みましょう。

【中学校教師】(5人の中学生に一人ずつ声をかけながら、ファイルを渡していく)

【高等学校教師】(3人の高校生に想いを届けながらファイルを渡していく)

(場面は次々に変わり子どもたちが一言ずつ決意表明をしていく)

映像終了

つぶれそうな私を助けてくれた解放未来塾に関わる大人たち

私は、小学校6年生から中学1年生にかけて、学校に行くのも家に居るのもいやな時期がありました。未来塾に行くのもあまり気が進みませんでしたが、仲の良い友だちに誘われしぶしぶ参加していました。その時、未来塾に関わってくれている大人が相談ののってくれ、今にも潰れそうな私を助けてくれました。その時のことは、今でも忘れません。

解放未来塾には、意見交換の時やわからないと言った時、わかるまで説明してくれる、言いたいことがあってもなかなか言えない私にアドバイスをしてくれる、優しく背中を押してくれる仲間がいます。

中学2年生の時、「教科書無償運動発祥の地」と言われている、高知県の長浜に視察研修に行きました。帰ってきてから、研修に行っていない仲間のために、そして研修に行った仲間と再度確認し合うために、報告会が開かれました。私にとって、仲間内ではありましたが初めての発表でした。

(うれしそうに生き生きと)私たちの先輩が学習会で勉強を重ね、貧しい人たちのためではなく、日本全国の子どものために、教科書をタダにする運動をしてくれたこと。おかしいと思った時に、「おかしいね」で終わるのではなく行動に移すことが大切だということをみんなに伝えたくて、授業が終わるとすぐ先生の所に行き、何度も何度も文章を手直しして報告資料を作りあげました。出来上がった時には、達成感一杯で「私、初めてこんなに頑張った」と言ったことを今でも鮮明に覚えています。

愛南町の「ふおーらむ」で初めて発表したときのこと

愛南町では、毎年2月の初めに「人権ふおーらむ」があり、A先生がコーディネーターで来てくださっています。ふおーらむの前日には、A先生を囲んで塾生みんなと話をします。未来塾が誕生した年からずーと私たちを見守り続けて、優しく包み込んでくれる先生は、とても大きな存在となっています。

先生と話した翌日のふおーらむでは、自分のことを「言いたい」「語りたい」気分になるのが不思議です。私がふおーらむで、ドキドキしながらも初めて発言した時のA先生の温かい笑顔は、みんなの前で自分の想いを素直に出せたことよるこびと充実感を共に感じている気がしました。

私はあの時、なぜあんなにもドキドキしたのか。「人が大勢いたから、初めて発言したから」いいえ、それだけではなかった。「そこに差別があり、知らないうちに自分にも重くのしかかっていたのだ」と、思います。

今、私たち家族を支えて続けてくれた父を支えるために

私は今、高校を卒業し、愛南町で訪問介護の仕事をしています。未来塾でたくさんの人と出会い交流していき、人とのつながりの大切さを知り、人と関わる仕事がしたいと思うようになりこの道を選びました。

私の家庭は、父、弟、妹の4家族です。母は、私が3歳の時に別れました。私が高校生になるまでは、伯母さんが私たちの世話をしてくれていましたが、高校生になってからは、父と私で家事を分担してやるようになりました。

そんな父は、糖尿病です。耳もほとんど聞こえていないし、目もよく見えません。血圧も高く食事制限をしている状態です。「いつ死んでもおかしくない。」とお医者さんに言われたこともありました。それでも父は、仕事も家事もやめず、私たちを支えてくれました。そんな父を置いて都会で生活することは、私にはできませんでした。私にできることは、食事制限のメニューを考えて料理することです。私なりに勉強し、食事制限しながら治療を続けたおかげで今では数値を平均まで下げることができました。これからも気を緩めずに、頑張っ私にできることをしていこうと思います。

(精一杯の思いを込めて)ときには、父や妹とけんかをして、家のことなんかどうでもいいと思うこともあったり、父に対して「マジで腹立つ、黙れよ」と思ったりすることもあります。正直言って、めんどくさい

し、きついです。でも、どんなにきつくても、今まで支えてくれた父のためなら頑張れる気がします。

仕事を始めて4ヶ月になりました。「働く」ということが精神的にも体力的にもとても大変だということがわかり始めました。失敗もあるし嫌だと思ふこともあります。でも、こんな私をフォローしてくれる上司や仲間ができました。

私は周りの人にたくさん助けてもらって、今があります。だから今度は、私が周りの人を支えられるようになりたいと思っています。

私を成長させてくれた未来塾を誇りとして

仕事をし始めてからも未来塾に参加しています。数ヶ月前まで塾生だった私です。誰よりも塾生の気持ちがよくわかると思います。みんなが意見を言いやすい場になるように、私なりに考え、指導者の人たちと話をしています。子どもたちと大人の架け橋になって、私だからこそできることを探していきたいと思っています。(笑顔で元気よく)仕事、家事、未来塾と全てをこなすのは、すごく大変です。支えがあるから、何か目標があるからやっていけるんだと思います。私をここまで成長させてくれた未来塾は、私の誇りです。誇りである未来塾を、今までもこれからも私を支えてくれる父を、人を、大切にしていきたいと思っています。私は、未来塾がある愛南町が大好きです。以上で私の発表を終わります。(拍手)

《コーディネーター A》

(Bさんの精一杯の語りに応えるように)最後に話をしてくれた、「私は未来塾がある愛南町が大好きです。」その言葉に秘められた思い。それはやっぱり、人権学習の中で培われてきた思いなんだと思います。現実にはやっぱり切ないし苦しいです。でも、共に歩く仲間がおる。身体を張って支えてくれる先生がいる。そんな人と人とのつながりの中で、私たちは生きるということを誇らしく、確かなものにしていくことができるんだと思います。人権学習はよろこびです。そして、それは、やっぱり一人一人のまなざしです。きちっと人の話を聞く力です。精一杯の気持ちを伝えていく力です。その関係の中で私たちの世界が変わっていきます。

愛南町とも何年も関わってきたC君に、この後、話をしてもらいます。青年のつながり、共に同和問題を解決していく仲間の関係の中で、厳しい現実を乗り越えてきた事実があります。その具体的な事実を通して、私たちに何ができるかということをしつかりと問いかけていける、そんな私たちの在り様を考えていける時間にしたいと思っています。それでは、映像を使いながらいっぱい話をしてもらいます。では、拍手をお願いします。(会場から大きな拍手)

《パネリスト C》

はじめに ~これまでのフォーラムのパネリストとして~

(いっぱいの笑顔で元気よく)皆さん、こんにちは！吉野川市山川町から来ました。Cと言います。このフォーラムのパネリストとして話をさせていただいたのは、パートナーのHちゃんがここでお世話になっていた時もありますので、それも入れると、多分、一番最初は8年くらい前にここで歌を歌ったと思うんですね。その後、結婚差別で闘っている時の話をここでさせていただいて、次に来た時には結婚差別と闘い、それを乗り越えてという話をしたと思います。3年くらい前かな。この壇上にHちゃんが来て僕よりいい話をしてくれたと思います。(笑いが起こる)僕が話をすると、「C、ふざけているんか」とよく言われるんですけど、Hちゃんが話をした時には、ここにいらっしゃる方も、中には涙した方も多分いらっしゃったと思うんです。

ですから、今日は、僕は5回目ということで、いろんなことをしようと思っていたんですが、仲間が急きよ来れなくなりまして、隣にいるBちゃんがですね、発表してくれるのをずっと聞いていて、自分が高校3年生の時に、徳島県のものすごく輝いた仲間と出会ったことを強く思い出しました。

その時に思い起すのは、やはり、僕らを支えてくれた、今ここにいらっしゃる方もいるし、遠く離れていた先輩もいらっしゃいますけど、たくさんの先輩が僕たち高校生を支えてくれとったということが、Bちゃんの話の聞きながら、頭の中に一人一人顔が浮かんできました。キーワードもたくさん出てきて、書いていたら、紙がいっぱいになってしまいました。

高校生の頃に誓った思い

大切なことをBちゃんがたくさん言ってくれたんですが、私がBちゃんの頃に考えていたことが一つあります。それは何かって言ったら、郷土文化会館という所に、毎年徳島県の高校生が400人か500人くらい集まって会をしていました。

その中で僕は思っていました。「自分はひょっとしたら差別を受けることはないかもしれんな」って。でも、自分が差別を受けなかったとしても、絶対に差別を受ける仲間がいる。ここだけでも400人から500人いる、この子たちの1人でも2人でもしんどい思いをする子がおったら、その時に遠慮して、「電話して相談なんてせんとこ」と思われる人間にはなりたくないなと思いました。僕は、困った時や悩んだ時に相談してもらえる、そんな人間でありたいなと思ったのが、今活動している原点としてあります。

あの時に、城東高校と城ノ内高校に電動車椅子で通っている子がいたと思うんですが、その時に、その障がいを持つ人たちから、ものすごいたくさんのことを学びました。その具体的な部分を言います。

その頃、徳島県下の高校にエレベーターがほとんどなかったんですよ。その時に、その子たちがエレベーターを作ろうと、きちっと設置する活動をしてくれたということと、そういうことを、「みんなのために」ということでやっていた、その輝いた姿に僕はいろんなことを学ばせてもらったなと思います。

映し出されたDVDの説明を交えながら

今日はですね、自分のことではなく、僕の1人の仲間にスポットを当てて話をしたいと思います。実を言うと、その子は僕の同級生です。小学校からの同級生で、僕も結婚しましたが、その子も結婚しました。その子の映像を少し交えながら話をしていきます。実名は出せません。実名を出せない理由は皆さんが話を聞いてくれたらわかると思います。同じ徳島県の中で起こった話です。

だいぶ厳しいですが、実際に起こった話を、これから映像を交えながら始めていきたいと思います。スライドショーという形で映像を流していきます。これから流れる映像は、先ほどBちゃんが使った映像を作ってくれた人と同じで、愛媛県愛南町のMさんがつくってくれた映像です。

(映像が映し出される。最初の場面は2009年度鳴門市人権地域フォーラムのこの会場である。その画面を示しながら、元気よく)皆さん、これがどこかわかりますか？ここですね。毎年Mさんはこういう映像として、人権フォーラムの内容をずっと撮り続けてくれてですね。スライドショーやBGMまでつけてくれています。この映像を、僕はよく講演会の時などに使わせてもらっています。

(映像は、何枚か人権地域フォーラムの様子を映し出した後、その夜に行われている交流会の映像に変わり、順にさまざまな場面が映し出され、時々Cさんの説明が入る)時間の関係上編集をしていますが、鳴門の人権地域フォーラムは、こうして前で話をした後、中学生・高校生が手を挙げて発表してくれています。今日もこの後中学生、高校生が発表してくれると思うんですが、こういうふうに発表しながら盛大に鳴門の人権フォーラムがおこなわれてきました。

(話の間も映像が映し出されている。その中で、1組の家族の映像が映し出される)

一人の仲間の歩んできた闘い ～交際中最悪の状況の中で～

今日お話しするのは、僕の同級生のA君と、同じ故郷に住みますBさんの結婚の時の闘いの話をしたいと

思います。A君は、男ばかりの3人兄弟の末っ子として生まれました。(映像の中のAさんの家族の場面を示しながら)この映像はケーブルテレビの映像には映っていませんが、彼にはこのかわいらしい女の子が生まれてくるんです。その女の子が生まれてくる前に闘いが起こります。

そのA君は優しい子で、今日、Bちゃんがさっきしゃべってくれたんですけど、A君のお父さんは、病気がちでずっと入退院を繰り返していました。そんな中で、お母さんが一生懸命役場の掃除、パチンコ屋の掃除など一生懸命して生計を支えてきました。A君は小学校低学年から、家計を支えるために新聞配達をしていました。彼は、勉強も一生懸命やって、地域のリーダーとして、僕を引っ張ってくれたのも彼なんです。僕の何十倍も何百倍も苦労して生きてきた彼なんです。

その彼が、僕と同時期ですから7年くらい前になるんですが、彼女の方のお父さんお母さん、そして兄弟がたくさんいるんですが、全て被差別部落の人を軽視する発言をずっと家庭の中でしてきました。ですから、Bさんは、自分が被差別部落の彼と付き合っているということをずっと言えなかったんです。2年間ずっと内緒にしたまま交際をしていました。

2人ともしっかり者で、学力も優秀でしたが、最悪の事態が訪れます。それは、付き合って2年経った後に、結婚する前に彼女のお腹の中に彼の子どもが命を宿します。それを知った彼女のお父さんとお母さんが、相手は誰なんだ、どこの子なんだと問い詰めます。もう、言うしかありませんから、同じ町内に住む〇〇君だと話します。その瞬間、親は相手が被差別部落出身だとすぐにわかります。その時、Bさんは、親戚まわり20数人に囲まれて、もうそこには居れないような状況に追い込まれていきます。

～心の折れたBさんへのたくさんの周りの支え～

親戚の中から、「知り合いに産婦人科の医者がおるから、明日その子中絶して来い」こう言われます。しっかりと勉強した彼女でしたが、親戚が泣き落としでかかると、涙に弱い彼女です。心が折れてしまいました。彼がその時に「一緒に幸せになろう」と言いながらどんなに励ましても、心が折れているから、皆さん、ダメなんです。「ごめんよ。もう、随ずしかないけん。あきらめて」そんな言葉しか返って来ませんでした。

そんな時、僕たちの小学校の時のある人権担当の先生がですね、その時に校長先生をさせていました。わざわざBさんの家まで行ってくれたんです。彼女の家に行って、「お父さん、お母さん、話を聞いてください。娘さんと話をさせてください。」そう言うと、彼女の両親からは「話をすることはないけんすぐ帰ってくれ」と言われましたが、その先生は粘ってくれて、「話をさせてもらえるまでここに待たせてもらいます。」そう言ってくれたんですが、でもね、皆さん、彼女には会えませんでした。僕たちもそれを聞いたのは当日の昼の12時前でした。「わあ、最悪の事態やな」と思いました。僕たちがいろいろな仲間のことで経験した中でも、最悪の事態でした。

ですけど、僕たちは連絡を取り合って、全国の仲間も集まってきて、仲間が25人、夜の7時に市場の会館に集まりました。その時に、集まった25人が打ちひしがれる中、僕はその集まってくれた25人にこう言いました。「今からみんなで手紙を書こう。必ず彼女に届けよう。」

実は、この25人の中には、彼女と同じように、自分の親が、自分がお腹にできた時に、母親が逃げて来て自分が生まれたという人がいました。みんなで手紙を書きました。でも、皆さん、考えてみてください。ほぼ監禁状態にありますから、手紙を届けるのはものすごく難しい。

でも、僕たちは、Bちゃんも語ってくれましたが、この活動の中で仲間がいっぱいいます。地区外の仲間がたくさんいます。怪しまれない吉野川市の役場の職員をしているある子がですね、たまたまBさんが借りてきたDVDを、その役場の職員の子に「また貸し」をしていました。それを返すという訳のわからない口実を作って、ちょっと大きめの袋にDVDと一緒に手紙を入れて、ニコニコしながら手紙を彼女に届けることに成功しました。

～手紙に込められた思いに心動かされたBさん～

あれほど彼が話してもダメだった打ちひしがれた彼女が、手紙を読んで心が変わるんです。彼の携帯電話にメールが入ってきました。「この子を産みたい」って。彼女は、「家を出る。でも、もう一回親の顔を見てから家を出たい」と言いました。だから、僕たち仲間は、夜通しずっと近くで待機をして、次の朝、彼女のお母さんが洗濯物を干すその隙をぬって、彼女はそのまま逃げてきました。その時にお腹に宿った赤ちゃんは、流産して亡くなってしまいました。

その夜、彼女のお父さんは、親戚一同を集めてこう言いました。「今日を持って、うちの娘じゃないからな。」いわゆる、皆さん、勘当です。その後、彼女は2度目の妊娠しますが、その2度目の子も流産で亡くなってしまいます。実は、先方映像で観ていただいた、2人と一緒に映っていたかわいらしい女の子、この子は、ちょうど今から3年前の1月に、緊急帝王切開で、1500gで生まれてきた3回目の子どもなんです。

～命がけて生まれた赤ちゃんが溶かした親の心～

この子が生まれる時、母子共に命に関わるような状況でしたから、彼が、彼女のお父さんお母さんにすぐに電話をして、「今すぐに病院に来てください！」そう言いました。お父さんお母さんは、いろいろ葛藤があったと思いますが、すぐに病院に来てくれました。

その日、初めて彼は彼女のお父さんお母さんと冷静に話をすることができました。差別をなくす、その願いを込めて子の名前を付けました。その赤ちゃんができた時に、「できるだけ、親は仕事を休んだらあかん。」と、彼女のお父さんお母さんが気を使ってくれて、「できるだけ私が面倒を看てあげるけん。」そう言ってくれました。2歳でようやくとぼとぼ歩き始めた小さい命。その命をずっとかわいがってもらおう。彼女のお父さんお母さんもその命を見ながら解放されていったのかなと、僕は思います。

いつも考える「親の幸せ」とは…

(温かいまなざしで)僕はパートナーのHちゃんとの間にたくさんの子どもが生まれ、3人の子どもの父親にならせてもらいました。一番上がもう6歳です。里温です。2番目が響希。2年前にここに来た時には生まれていなかったんですが、3番目は、満愛(まあな)という女の子が生まれました。そんな中で、僕は3人の父親として子どもたちの顔を見ながら、(語りの間バックミュージックと共にゆっくりと流れている映像に、幸せそうな笑顔で目をやり)皆さん、親の幸せって何だろうなって僕はいつも考えるんです。

よく、学校の先生や皆さん方、「子どもの幸せって何だろう」ということを日常によく語られると思うんですが、僕は、子どもの顔を見ながら、繰り返しになりますが親の幸せって何だろうと考えるんです。例えば自分の子どもがプロのスポーツ選手になる。公務員になる、芸能人になる。これは表面的なことと違うかなと思うんです。自分の子どもの盛大な結婚式に参加する。

つい先月なんですけど、熊本の僕の友だちが、お母さんと縁を切って、仲間だけでパーティ形式で結婚式をおこないました。でも、最高の結婚式でした。僕は、結婚式は2人だけのものだと思います。よく、おじいちゃんおばあちゃんがこんなことを言いませんか？「早く孫の顔が見たいな。孫を抱くのが私の夢やな」でも、皆さん、考えてみてください。世の中には、孫が欲しくっても生まれてこない人はいっぱいいます。だから、僕はいつもおじいちゃんおばあちゃんにこう言います。子どもが生まれてくるっていうのは、一つの奇跡なんと違うかな。

そうすると、いったい何が親の幸せなのかなと、子どもの顔を見ながら考えるんですが、例えばですね、日本の人口を考えて、日本に今仮に、1億人の親がいるとします。母子家庭の親もいれば父子家庭の親もいます。親がいないでじいちゃん婆ちゃんが育てている家もあります。でも、一億人の親がおったら、一億人

すべての親に関わることがたった一つだけあると思います。

「親の幸せっていうのは、子どもが幸せになることと違うのかな。子どもが目いっぱい幸せになること」と違うのかなと思います。まだ若いので、親が死ぬ前のことはわかりませんが、親が最後死んでいく時に、「うち子どもが3人おるけど、財産分与どうしようかな。」「あの土地誰に分配しようかな。」僕は、先ずそんなことは考えないと思います。死ぬ間際に心配することがもしあるとするなら、自分の子どもが幸せになっているか。それ一つだと思います。

だから、僕はBちゃんとか、前に中学生が座ってくれていますけど、若い子たちにいつも言います。「あのね、幸せになる時に親に気を使う必要ないよ。めいっぱい幸せになったらええと思う。例えばこの人と幸せになれるという信念があるんだったら、離婚しても絶対に言い訳されんて。自分が選んだ人やし。Hちゃんみたいに親に話を聞いてもらえなかったら、自分が幸せになった姿をしっかりと見てもらいなさい。それが親の幸せやけん。それが、一生懸命育ててくれた親への最高の恩返しやけん。」そう若い子に言います。

当たり前が当たり前でおる世の中を

若い子はみんな優しい。人権教育学んでいる子はみんな優しい。でもね、僕は思うんです。結婚差別は昔からずっとあります。「僕は結婚したから、もう関係ないから知らん。」そんなことは口が裂けても言いたくない。結婚差別は昔からあります。部落問題だけではありません。いろんな差別があります。誰が残してきたんですか。誰が責任取るんですか。

やっぱり、私たち先に生まれた人間が、できるだけ次に持ち越さないように、当たり前のことが当たり前で通る世の中を、私たちの先輩のように作っていききたいなと思います。皆さん、僕は36歳です。Hちゃんは35歳です。まだまだひよ子です。今、この場に座らせてもらっている。Bちゃんもそうです。D先生もそうですが、皆さんが作ってくれた、先輩方が作ってくれた、その生き方に尊敬の気持ちを決して忘れずにです。ここにいる皆さんと同じ、差別をなくしていくという輝いた生き方をしていきたいなと思っています。

いろんなことがあります。救えた命、救えなかった命。彼も彼女も言いました。闘いがひと段落した時、メッセージをくれました。「あの時、もし、お腹の赤ちゃんを殺されていたら、墮していたら、私はこの世に生きていなかったと思う。」彼も同じことを言います。最後に彼女が言った言葉を皆さんに伝えておきます。「私は、学校で歴史の勉強はものすごく習ったけれども、差別と闘う、自分の身を守る方法は習わなかった。教えてくれなかった。若いみんなには伝えたい。みんなは自分の身を守る方法と、闘う方法をきちんと学んでから大人になって欲しい。」それが、彼女と彼の願いでした。

皆さん方にしんどい話もしましたが、徳島県にもこういう現状があり、その守れた命、守れなかった命、同和教育の中でつないでくれたよろこび。輝き。そんなことを、皆さん方と一緒に考えながら、今日の鳴門人権地域フォーラムを盛り上げていけたらなと思います。先ほど使いました映像の中の2番目のBGMは、この後歌ってくれると思いますが、愛南町の解放未来塾のテーマソングになっています。一番最後に、D先生が面白い話をしてくれた後、みんなで一生懸命歌ってくれると思いますので、よろしくお願ひします。私の話はこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

4月に、C君やパートナーのHちゃんの映像を藍住中学校の子どもたちに観せました。映像も力があつたけど、C君の言葉に滅茶苦茶力が湧きます。言葉の力ですね。滅茶苦茶力が湧いてきました。高校時代から彼の言葉に引き込まれていく。あの時の高校生仲間というのは、やっぱり一つの理想として、ああいう子どもや青年になって欲しい、そんな思いで中学生集会や高校生集会にずっと関わってきました。本当のことが言える。本心を語れる。そんな人権学習をつくっていききたいと思います。

この後、D先生に話をしてもらおうんですけど、今日はお父さん来てないかな？(パネリストのDさんから、いっぱい笑顔で「いえ、来てないですよ」と言葉が返る。そのやり取りを受けて、会場から笑いが起こる)実は、何度かこの前で話をしてもらったんですけど、8年前に話をしてもらった時に、お父さんがこの会場においでしていることを知らなくて、お父さんの話をしてしまったということがありました。

(楽しそうに思い出を語るコーディネーターの姿に、会場から再び明るい笑いが起こる)今から22～23年前になるんですけど、学年全体で自分の本心を語り合うという学習が始まりました。それは何かというと、自分の家族や自分自身のことを語っていく。その、教師の本気に語る姿に、子どもたち自身のことを語っていくんです。その時にD先生は、自分の母親や自分の父親とのやり取りを語りました。

彼は、自分の家族の中に部落差別意識がないと思っていたのが、それがあったということに衝撃を受けます。そして、そのことを指導案の中に書き込んでいきます。そして、その公開授業の中に母親を連れてくる。父親を連れてくる。家では話をしても、学校の授業に親を連れてくるということはなかなかありません。そういう授業を彼は創ってきました。公開授業の後の研究会に彼の父親が残ってくれたことがありました。その時に、家族のこと、家族の中で語ったことを伝えながら、そこに残ってくれていた父親に、最後に「父ちゃん、わかってくれたか？」という話をしました。わかっていないのは自分と違うかって、その時私は思ったんですけど、授業の、そして研究会のその場においてくれる親のすごさをその時思いました。

本気で語る。その本気がその人間性を磨いていきます。子どもたちの関係を変えます。(Dさんの出版となった『PM(ペットボトル・マジック)』という水色の本を、手に持ち会場に掲げながら)この春に、彼は、『PM(ペットボトル・マジック)』という小説を書きました。

彼は、これまでに同和問題を取り上げた人権劇をいくつかまとめています。その原稿を出した時に、出版社が、「同和問題は取り上げることができません。それは、明石書店や解放出版社の分野です。私たちの出版社は、そういうものを取り上げることができません。」ということで、同和問題をベースに書いた作品が却下されました。これは、それから書き上げて完成した作品です。高校時代の高校生切ない思いがあります。

「人権」というものを、しみじみと味わう作品が書き上がりました。彼に、今回のフォーラムのチラシにメッセージを送ってもらいました。ちょっと紹介します。

描き、伝えたかったこと…それは、若者に向けた「人権と差別」というメッセージ

「1990年代、」THE BLUE HEARTSの「青空」……あの頃、あの詩を、どれだけの人々が、どんな思いでロずさんでいただろうか。小説は、「たかが小説」である。直接的に、即効性のある、大きな力になることはない。しかし、その小説に込められた精神が、広く社会に受け入れられるならば、「たかが小説」とは呼べなくなる。精神は、人々の中に深く根を下ろし、染みわたり、普遍的な精神構造の根幹をなすことになる。それは構造的な凌駕(りょうが)してしまうかもしれない。小説だけではない。文化という文化のすべてに、反差別、人権という視点が根付けば、人々の意識も、社会ですら変えられるかもしれない。なぜ小説『P・M ペットボトル・マジック』を描いたのか。それは、部落差別への怒り。それは、「ふるさと」という、誰もが抱く郷愁。それは、次に代を担う若者へ向けた、ささやかなメッセージ。

彼が作品に込めた深いメッセージも含め、彼自身がいっぱい話をしてくれると思います。笑いも取ってくれると思いますので、そのあたりも期待をしてください。皆さん、拍手をお願いします。(会場内に笑いがこぼれながら拍手が起こる)

《パネリスト D》

「THE BLUE HEARTS(ザ・ブルー・ハーツ)」によせて

(立ち上がるのと同時に軽快なBGMが流れ、その曲に合わせて温かな笑顔の中、語りが始まる) たい

ま流れている曲は、「青空」という曲です。私から上の世代の方はわかると思うんですが、この曲を、現在の高校生と結びつけるっていうのは、実際無理があるんだろうと思いました。この曲は、1990年代で、もう24～25年前に聞いていた曲ですから。

(当時に思いを馳せるように、たのしそうにゆっくりと)でもねえ…これ、知ってるんですよ。中・高校生がこのグループのこと、知ってるんです。「THE BLUE HEARTS(ザ・ブルー・ハーツ)」を知っているんですよ。「リンダ・リンダ」とか「トレイン・トレイン」という曲なんかを知っていますから。…結構最近の中・高校生も知っているということに気がついたのが、去年のことでした。

お家の方も聞かれていて、子どもにも聞かせている。だから、中・高校生が知っているんだという、このことがわかって、だったら、あの時の思いを中・高校生に今一度伝えたい、そういう思いがありました。(しばらく、『青空』の曲が流れた後)1990年代の「THE BLUE HEARTS(ザ・ブルー・ハーツ)」が流行った頃というのは、盛んに若者のバンドが真似をしたというか、ライブで歌っていたと思うんです。そして、その後も、今のあのフレーズを歌っていた人がいました。だから、格別な思いをこの曲に持っていたことは間違いないんです。ただ、時代も過ぎてしまって、この曲を知らない中・高校生も増えてきたんですが、今一度、あの歌詞に込められた思いみたいなものを、小説の中に入れ込められたらなという思いで書きました。

(しみじみと)「書く」と言っても、先ほどA先生から話がありましたが、実は、いろいろないきさつや葛藤があって、昨年、ちょうど今のこの時期だったと思うんですが、思い悩むことが多かったのも事実です。

(照れくさそうに)私はこの話を最初にするつもりはなかったんですが、(会場から笑い)ちょっと話を元に戻してみたいと思います。私は基本、口下手ですので、上手くはしゃべれないと思います。笑わすことばかりを考えてはしゃべりませんので、お聞き苦しい所もあろうかと思えます。

娘から突然問われた「破戒」の意味

上の娘が高校1年生になります。先日、その娘がリビングで勉強をしていたんですけど、(笑顔で前の小学生たちを見ながら)子どもたちにはちょっと難しいかな?「島崎藤村」という人の名前が出たんです。(中学生たちを見ながら、確認するように)中学生はわかっているかな?わかってない?(表情を感じながらすぐに言葉を返すDさんの雰囲気、会場から笑いが起こる)島崎藤村というのは、明治時代の文学というか小説を書いていた人です。『破戒』という作品があります。子どもたちには難しい話になるかもしれませんが、「戒めを破る」、と書いた『破戒』という小説があります。私も子どもの時に習いました。ここに社会の先生がもしおいでたら、出来れば一言言い添えておいてほしいなと思えます。

娘が、『破戒』ってどういう意味?」って聞くんですよ。学生当時、私もわかっていませんでした。でも、受験の為に覚えました。「島崎藤村=破戒」それだけです。それ以上のことを望みもしないし、求めもしない。ただ、受験に出てくればそれが答えられるから、それでOKっていう学習の仕方でした。

(元気よく)娘がリビングで勉強していたその時、他のことは何にも聞こえていないのに、『破戒』ってどういう意味?」その言葉だけが聞こえてくるんです。不思議なものやと思います。だから私も反応してしまいました。「当時、小説にすることは全くのタブーとされていた、部落差別、同和教育、部落問題を題材にしたテーマで、当時では本当に考えられないことを、島崎藤村は小説にして書いたんだよ」という話を娘とします。娘は神妙に聞いています。でも、私もあまり深くも話しませんでした。娘も深くも聞いてきませんでした。それでかまいません。彼女がそう聞いてきた、それだけで充分だろうなと思えます。

私も、中・高校生の時に、社会科の先生が何か一言でも言うておいてくれたらなと思うこともありました。それはベースに、人権学習、同和教育の中で、部落問題学習をされているという前提があるわけです。それがされていない所で『破戒』を習っても、多分何にもわからない。そんな家族です。

小説の話は今出したんですが、私は、正直国語は苦手です。5段階評定で言いますと、「5」はない。よくて「4」、アベレージ「3」。国語に関しては、非常に苦手意識があったと言っていいです。皆さんも、私と同じようなタイプの方もおいでと思うんですが、大丈夫です。何が大丈夫かという、国語の成績と、小説を書くということは別です。(会場内に明るい笑いが起こる)

小説に求められる「その人にしか書けない文章」「その人にした見えない視点」

文芸社という出版社から出版したんですが、秋山さんという編集をされる方がおいでで、その方からいろんなアドバイスを受けながら編集の作業をしていったわけです。本当にいろんなことをよく知られている方で、話を聞いてるうちに、「本当に国語が好きな方なんだな」と思っていました。

秋山さんと編集のやり取りをしている中で、秋山さんに一つ聞きます。「それだけご存知ならば、あなたが本を書かれてはいかがですか？」(会場から明るい笑い)すると、秋山さんは、「ムリーッ！」と言われました。「ムリーッ」と、20歳前後の方がされるそぶりを真似して言われました。無理なんだそうです。私の中では、国語のできる人が小説を書く。小説を書くような人は国語のできる人。そういう観念を持っていたんですが、どうもそうではなさそうです。

秋山さんは、一つの例としてこんなことを話しておられました。「よく、小学生でコンクールとかに作文を出す子がいる。だけど、すごく面白くない」だそうです。文章が整い過ぎているんだそうです。その一方で、文章はハチャメチャなんですけど、(ニッコリと子どものような笑顔で)キラリとした文章を書く小学生がいるんだって。その子の方が評価は高いんだそうです。

学校の先生って言われる人の多くは、整った文章、読みやすい文章、きれいな文章、流れるような文章。そんな文章をすごく期待していたりとか、求めたりするけど、でもプロの皆さんは、その子にしか書けないような文章、見えないような視点というようなものを見ているんだそうです。だから、国語の点数が、「5」は「5」でいいんだけど、「4」でも「3」でも「2」でもね、自分の思うような文章を書くことが大事なんだらうなと気づかされました。そんな可能性を秋本さんの話の中から聞きました。

人権を語り合う中学生交流集会で語られた話 あれこれ… ～語られた差別の実態～

一つだけ、この話をしておきたいと思います。ご存知の方もいるかと思いますが、その昔、アメリカの東部に「ロゼット」という小さな町がありました。イタリア系移民が暮らしていた町だそうです。その町で、1950年代、心臓病の発症率が、まわりの町に比べて半分くらいと圧倒的に低い。その原因を調べようとしたお医者さんがいたそうです。血液検査、診察、診断、聞き取り調査、いろんなことをやって来たんですが、結果、何の違もないという結果しか出なかったんだそうです。

よくよく考えた結果、「もし違いがあるとすれば、ロゼットの町の住民は、非常に相手を思いやり、尊敬し、支え合うという土壌があった。それが、病気の発症率が低い、そして長生きであるということの理由付けであるのかもしれない。」と言ったんだそうです。ところが、その町は1960年代後半から、お金とか名誉とかを求めたり、遊びに出るようになって、過剰に働くようになった結果、他の町と同じくらいに発症率になったということです。

私が何を言いたいかと言いますと、この前の「人権を語り合う中学生交流集会」のことについて言いたいです。この前、鳴門市で「人権を語り合う中学生交流集会」を開きました。7月28日です。そこで被差別の実態も出てきました。別れたお父さんのおばあちゃんが亡くなって、そこに手を合わせに行こうと思うんだけど、そのことを話してくれた本人は被差別部落出身で、手を合わせに行こうとしたんだけど、歓迎されなかった。もう2度とここに来てくれるなという対応であしらわれた。これは実際にあった話です。子どもの時には、「あそこの地区の子とはもう遊ぶな」と言われた。

語られた「ノミの話」が問いかけるもの…人の可能性

そういう被差別の体験を聴く一方で、こんな話も会場から出てきました。ご存知かどうかわかりませんが、ノミの話ってわかりますか？ノミの話。何の話かって言うと、ノミっていうのは、身の丈の200倍くらい跳ぶんだそうです。人間の身長が2mだとするならば、200倍ですから、400mくらい跳べる勘定です。ノミは、それくらいの跳躍能力を持っている。そのノミに箱をかぶせるんだそうです。箱をかぶせたら、跳べていたノミは、途端に跳べなくなる。箱にぶつかるから。しばらくその状態に置いていると、箱にぶつからない程度にしか跳ばなくなるんだそうです。

不思議なものですね。箱をのけても、そのノミはそれくらいにしか跳べなくなってしまう。実は、自分の可能性っていうものが、それくらいしかないんだというふうに刷り込まれていくんだそうです。人間も、それは一緒かなと思うんです。ところが、この話にはおちがあります。そのノミがまた1mくらい跳べるようになるんだそうです。箱の中の高さしか跳べなくなっていたノミが、どうしたらまた1mくらい跳べるようになるか。どうしたらいいと思う？(前の席の子どもたちへニコニコと笑顔で問いかけながら)

急に聞かれてもわからんよなあ。1mくらい跳べる、要するにそういう規制をかけられていない、自由度の高いノミと一緒にやるんです。それだけで、跳べなくなっていたノミは、また跳べるようになるんだそうです。跳べなくなっていたノミは、自由に飛ぶノミを見て、「ああ、自分も跳べるかもしれない」「そういえば俺も前は跳んでいたなあ。それやったら俺もまた跳べると違うかな。」と思って、元通りに跳べるようになるんだそうです。もしよければ、インターネット検索してみてください。「ノミの話」(真剣に奨めるパネリストの姿に、会場から明るい笑いが起こる。インターネット上では「限界を作るな」というテーマで紹介されている)ただ、どれが本当かウソかわかりませんが、そういう話があるんだそうです。

可能性にふたをしてしまえば、そこまでしか行けなくなるという話です。ふたをしなければ、生物というものは、生命体というものは、もしかしたら、人間も可能性というのは無限大に備わっているかもしれないということなんです。

本を苦手な人にも読んでほしくて

私が今回小説を書くに至ったのも、初めから出版しようとして書いたわけではありません。ましてや、先ほど言いましたように、国語は「3」か「4」です。そんな子は小説は書けない。作文を書くのも苦手と書いていましたから、本を書いて出版するなんて思ってもみませんでした。ただ、いろんな生き方の中で、たまたま自分の可能性が広がったということです。

これは、私だけに言えることではない。全ての子どもたちもそうですし、この会場にいる、私を含めたみんながそういう可能性を持っているんじゃないかなと思うんです。かねてから中学・高校生に読めるような、人権に関する小説を出したいとは思っていました。年配の方々には、退屈な本になるかもしれません。それは、中学・高校生の特に私のような本の苦手な子に読んでほしいなと思いました。

本の苦手な子は本当に読みません。私も読みませんでした。だけど、やっぱり読んでほしいなと思うし、(語りに力が入り、力強く)出来ることならば、差別の問題や人権問題に関わった本を読んでほしいなあと思います。が、なかなかそれは見当たりません。私の知る限りでは見当たりません。ちょっと難しい本はあります。『永遠のそら』という本も感動はしました。けど、長いです。字が小さいです。あれを本の苦手な中学生に読めと言っても、ちょっと無理です。

だけど、スッと読めて、スッと終えて、何かわからんけど、「残ったな」と思えるような本があったらなと思いました。ですから、私のコンセプトは、そういう視点で書いた本になったわけです。たくさん言いたいことはあったわけですが…、(いたずらっぽくコーディネーターの様子を見ながら)いいですね。ここで話

を止めたいと思います。終わります。(会場からの明るい笑いの中、拍手)

《コーディネーター A》

藍住中学校の子どもたちに本の紹介もして、読んだ後、感想も書いてもらいました。15冊ほどうちの学校で購入してもらって順番でまわしながら読んでもらっています。「やっと私にまわってきた」と子どもたちがすごくよろこんでいるんです。

その感想の中に、「この本が回ってきたことがうれしい。初めて小説というものの本一冊を読んだ。最後まで読んだ。時間は3時間くらいかかったけど、高校生の切ない思いがこの本の中に溢れていました。夏休みの切ない体験が、そして、感動がよろこびが溢れていました。」そんな言葉がありました。何人かの感想をお手元の資料の中に入れてあります。(会場内で一斉に資料をめくり、感想文の書かれた学年通信を探す姿がある)読んでみてやってください。生徒の感想です。

「私は物語のストーリーに吸い込まれるように読んでいった。主人公は、何の変哲もない日常を淡々と過ごしている。そんな主人公がある少女と出会って、彼の日常は一変する。この物語にはしっかりと書かれていないが、彼女は津波で家族や友だちを失っている。主人公は、彼女の体験を「わがこと」としてとらえ、涙を流した。

私は彼と同じことができるだろうか。私たちは物事を客観的にとらえ、「かわいそう」と思うが、そのいたみをなかなか「わがこと」としてとらえることはできない。感情移入した仲間(友人)の悲しみを「わがこと」としてとらえたとき、涙が溢れてくれが、遠くのこと、ひとごととしてとらえたときには、「かわいそう」という思いだけで終わっていく。私たちは、一人ひとりの思いを語り合う人権学習を実践しているが、それは、仲間の思いや願いを「わがこと」としてとらえ、自分を深く見つめていく作業をしているんだと思う。この物語の中に描かれた、人権や差別へのメッセージを私なりに受け止め、私の人間性を磨いていきたいと思う。」

大人が感じるものと、中学・高校生が感じるものは見事に違います。私はここまでの文章は書けなかったと思います。ここまで深く感じることはなかったです。中学生の純粋さにやっぱり胸を打たれます。

子どもたちに、いつも私は話をします。「みんなは私の生きがいなんだ。」と。中学生の姿にやっぱり癒されます。人権学習のよろこびはここにあります。誰にも言えなかったこと、誰にもこのことを語ることはないと思っていたことが言える。そして、その悲しみや苦しみをしっかりと受け止めながら、支え乗り越えていく。

C君の仲間が、その一番厳しい現実を乗り越えさせた。その25枚の手紙が1人の人間を生き返らせていく。そんな力があるしよろこびがあるんだと思います。私たちに何ができるか。そんな思いをこの会場でつかんでいくこれからの時間になればと思います。10分ほど休憩を取らせてもらいます。

窮屈な中で坐っただけの皆さんがエコノミー症候群にならないように、運動してください。

前半終了

=意見交換=

《コーディネーター A》

(一言一言に思いを込めながら、じっくりと)一人一人の思いを表現すること、発表することはすごい大事です。でも、それ以上に大事なものは日常です。学ぶことです。学び続けることです。聞く力です。聞いてくれるから本当のことが言えます。本気で聞くから、溢れる思いが一人一人の中に湧き起ってきます。それをドキドキしながら言葉にした時に世界が変わります。まさに、人権学習が「わがこと」になります。

(パネリスト一人一人の思いに心馳せながら、しみじみと)幸せはどこにあるか。私たちの心にあるんだと

思います。「親の幸せは、子どもの幸せだ」というC君の言葉にやっぱり力をもらいます。Bさんが、お父さんの生きざまを語った時に、やはり、深い深い親子の絆を思います。私たちの言葉、私たちのメッセージ、それが、私たち自身の人生をつくっていくんだと思います。D先生の小説が、徳島県下に大きな力を与えていく。人権学習の質が変わっていく。自分のことをしっかりと語っていく人権の学びが広がっていく。そんな力を思います。

(温かいまなざしで)この10分の休憩時間にも、D先生の小説を食い入るように読んでいる方がおいでて、すごいなあと思います。やっぱり、人のつながりってうれしいなあと思います。また、この小説「ペットボトルマジック」が職場や家族の中で広がっていったらうれしいなあと思います。

語りが語りを生んでいく、そんな時間を、本当に限られた時間ですけど、皆さんと共有できたらと思います。(ニコニコと)ドキドキしながら、発表しようと最前列に陣取っている藍住中学校のみんな、私はみんなが大好きです。(会場に、コーディネーターの思いを受け止め、明るい笑いに包まれた温かい空気が広がる)そこにいてくれるだけでうれしい。発表してくれたらもっとうれしい。はい、じゃあ、限られた時間、多くの人の思いや願いを返してくれたらなあと思います。(前2列目から真っ直ぐに手が挙がる)いきましようか。

《フロア S》

(立ち上がると後ろを向き、フロアの参加者を真っ直ぐに見渡しなが)すみません。今年も鳥取県から来ました。こうやって来るようになって8年になります。今日は、私はここ鳴門のフォーラムを続けてくださる皆さん方へお礼を言いたいなあと思って来させていただきました。

(切々と)実は、私の夫が今年の3月に大腸がんが発覚して、4月に手術をしました。手遅れで、癌そのものには全く手が付けられなくて、人工肛門だけを造って、今、抗癌剤治療を続けています。その夫と共に癌と闘いながら、私は今年59歳になって来年が定年ということで、これまで鳴門に毎年楽しみに来させていただきましたけれど、やはり、経済的なものやいろんな問題等で、来年以降、本当に何回来させてもらえるのかわからないなあと思いながら、今日この場にいます。

(精一杯の思いを込めて、力強く)私はこうしてこの8年間の中で、毎年皆さんの前で語ることを通しながら、すごく育てていただいたな、みんなの前で話せる力を本当につけていただいたな、そう思います。(思いが溢れ、マイクを持つ手を震わせながら)たとえ来年から、もしも来られなくなったとしても、私は、ここでいただいた力を皆さんにお返しする気持ちを込めて、わずかな力ですけど、ここで築いた力を基に、地元で死ぬまで人権教育を続けていくであろうことを再確認させていただきます。

(きっぱりと)やっぱり、いくらここで偉そうなことを言っても、自分の地元で、足元でどれだけ動くことができるか、そのことがこれから問われていくんだということを、強く思います。ここで育てていただいたことを、決して無駄にはしません。地元できちんと生かして、地元の中で自分の足元をしっかり見つめながら、ここで学ばせていただいたことを、これからの行動指針として、しっかりと行動していきます。

今年は、これまでの感謝の気持ちを皆さんにどうしてもお伝えしたくて、ちょっと無理をしながらでもここに来させていただきました。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

(しみじみと)ありがとうございます。もう、何回も参加されている方、今日初めて参加された方、皆さんそれぞれの参加の仕方があります。集まった一人一人が自分を伝えていく。その思いをみんなが受け止めていく。そんな学びの場を大事にしたいなあと思います。はい、続いていきましょう。(前の中学生に温かいまなざしを送り、発言を促しながら明るく)顔で手を挙げるのではなくて、ちゃんと手を挙げてな。(会場から明るい笑いが起こる中、中学生との温かいやり取りがある)はい、誰か手を挙げてください。じゃあ、ここに

出て、後ろを向いてな。

《フロア K》

(コーディネーターに誘われるように立ち上がり、フロアの方を向き語り出す)藍住中学校3年のKです。私はついこの間まで、「人権を語り合う中学生交流集会」という場所で、実行委員長をさせてもらっていました。(一生懸命言葉を探しながら)私は、自分ではけっこう積極的に人権問題に取り組んでいると思うんですけど、その理由は、やっぱり、差別を受ける人とか、差別をする人をなくしたいという気持ちがほとんどで、…自分が今できていることは何なのかということ、いつもすごく考えて行動しています。

(語ることを迷いながらも、思い切ったように一言一言をゆっくりとつないでいく)今、藍住中学校の3年生は、「語り合いの人権学習」っていうことをしているんですけど、その学習は、みんなが本心を語ります。でも、なんか…、手がさっと挙がらないと雰囲気がすごく悪くなって、発表しにくい雰囲気になります。

…私も何回か発表したことがあるんですけど、やっぱり言い辛くて、そういう雰囲気の中で言った時は、「言わなければよかった」とか思ってしまいます。でも、「人権を語り合う中学生交流集会」に行ったら、みんなが人権について考えているし、自分と同じ気持ちを持った人がたくさんいて、すごく言いやすい雰囲気がつくられています。

そういう場ではどんどん発表ができるんですけど、やっぱり、学校だったら、その雰囲気はつくれなくて、その雰囲気の違いに…なんか…がっかりするっていうか、真剣に取り組んでいない子がいっぱいいるんだなって毎回思います。(言葉に詰まりながらも、語りをやめようとはせず、一言一言を懸命に紡ぎ出すように)……学校には、差別発言をする人もいるし、無関心な人もいるんですけど、……私は、そんな人たちに、ちゃんとした知識を身につけてほしいと思っています。

人権学習をしてくれる先生の中にも、先生の授業で「興味がないんだろうな」とか、「真剣に考えているんだな」というのはわかるので、(自分に言い聞かせるように)…無関心な人がいなくなるために、自分に何ができるかをもっと考えて、行動に移していけたらいいなと思います。(拍手)

《コーディネーター A》

(語り切った中学生の思いを全身で受け止め、精一杯の思いを込めてじっくりと)中学生の切ない思いを、どう聞いていただいたのでしょうか。私たちの職場、私たちの地域社会、そっくり同じ現実があります。なかなか「わがこと」になりません。がっかりすることもあります。でも、歩き続けていく誇り、歩き続けていくよこび、そんな仲間との関係を広げていく。今、自分に何ができるかということ問い続けていく。それができるのは、自分自身だと思うんです。

(語りに力がこもっていきながら)私は藍住中学校に赴任して2年目になります。この職場で良かった、この仲間と出会ってよかった。この子らと出会えてよかった、そういう日常を作り続けたいと思います。

現実やっぱり厳しいです。だからこそ、こういうたいそうな人権フォーラムがやっぱりあるし。…何の問題もなかったら、お互いの存在をかけて動いていくことはないんです。家族の中の現実、職場の現実、学校の現実。その中で、自分に何ができるかということ問い続けていく。自分自身を磨いていく。そんな我々の関係をつくり続けていきたいと思っています。(ニッコリしながら)中学生が語りましたので、中学生でない方も語ってください。(空気が和み、会場から笑いがこぼれる)挙手をしてください。いきましょ。

《フロア M》

(穏やかな笑顔の中で)失礼します。愛南町から来ましたMと申します。先ほどCさんがだいが宣伝してくれました。ありがとうございます。私もここに来るようになって、かれこれ8年になりますが、その間に発

表もさせてもらって、このフォーラムの中で、ここ5年ほど愛南町から舞台に立たせてもらったんじゃないかなと思います。

一番最初に未来塾塾長の山崎ひかるさんがここで発表して、その時にも感じたんですけど、今回、2代目塾長がここで発表して、改めて、ここに来て今気づいたんですが、愛南町の解放未来塾は、小学校の5年生から2年間、中学校3年間、高校で3年間、子どもたちは8年間関わります。

(Bさんの成長に思いを馳せながら、しみじみと)今年で解放未来塾結成8年ですから、2代目塾長として今日発表したBは、解放未来塾結成の年に小学校5年生で入ってきて、今年卒業しました。その間、傍から見ていて、先生の気分になれたかなと思います。子どもたちが育っていく様子をずっと見ていくことに関して…。

小学校5年生の時に「何が始まるのかなあ。」と不安でたまらんという顔をしながら開講式を迎えて、8年経って、今こうして卒業して、フォーラムでこういうふうに堂々と発表する。その過程をずっと見てきて、変化になかなか気づかないということもあったんですが、今、この場において発表を聞いてですね、「ああ、変わったんだ」という実感がすごくしています。

(うれしそうに)未来塾の欠点なのか長所なのかわかりませんが、小学校、中学校、高校と、そういう、異学年の団体で活動しているというのが少ないのではないかなと思うんですが、小学校5年生が、高校3年生のこういう発表する姿を見て、「すごいなあ。カッコいいなあ」と思ってくれたらという願いが、未来塾の活動のスタートだと思います。その「カッコいいなあ。自分もそうなりたいなあ」という憧れが自分の目標になってくると思うし、そして、先ほども何回も言っていましたけれど、今回、改めてそういうつながりというものを実感することができました。

(じっくりと)それと、先ほど発表していたKさんのことに触れたいと思うんですが、未来塾の中では、本当に年齢差はありますが、みんなが自由に言い合っていて楽しくやっています。ただ、このことを小学校で、中学校で、高校で、昨日こういうことがあった、ああいうことがあったということを自由に言えるかということ、それはどうかな。言えないことがいっぱいあったんじゃないか。自分たちが活動している様子を、解放未来塾の中でしか言うことができないというのは、まだまだかなという気がします。

そう思った時に、子どもたちの発表の場というものをつくる必要があるんじゃないかということで、愛南町にも「人権ふおーらむ」というのがあります。そこには、未来塾の子どもたちが一番に手を挙げて発表する姿があります。ここに座っているBさんも、前日にA先生と話をして、明日は私も何か話そうかと言って帰って、一人で考えているんだと思います。そして、こういう会場でいつ意見を求められてもいいように準備をしながら、それでも、やっぱり手を挙げるということに関しては、相当勇気がいるんだなと思います。でも、やっぱり、後輩が来ているから、ここは手を挙げて塾長らしい姿を見せないといけないなと頑張る姿も感じます。

(力強く)ただ、私たちも、そういう子どもたちの発表する場所を町内全域に広げるという意味で、その「ふおーらむ」を作りましたので、未来塾の子どもたちが自分たちの学びだけで活動を終わるのではなく、こういう発表の場で、全然知らない人のいるところで話し合うことで、同和問題もまだまだあるし、その解決のためにこういう活動をしているんだということを、もっともっと啓発していく必要があるんだなあということを思いました。

この会場に来て、改めてBの姿を見て気づかされた状況です。私も今年は4月からこの人権啓発の現場から離れましたので、未来塾との関わりは少なくなりつつはあるんですが、改めて傍から見た立場で、解放未来塾を支えていきたいなと思います。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございました。できるだけ多くの皆さんの言葉を聞いてみたいと思います。どうでしょうか。手が挙がりませんか？(会場を見渡しながら)はい、どうぞ。

《フロア K》

失礼します。愛南町から来ましたKです。(ニコニコと、溢れる笑顔の中で)今日は、私の仲間のBが発表するというので、本人以上に私が朝からドキドキしていました。発表してホッとして、「肩の荷が下りた」という感じです。でも、今、中学生の方の発表を聞きながら私もドキドキして、彼女の思いがわかるとは言えませんが、でも、なにか気持ちが伝わってきました。

愛南町と徳島は、四国の中で対角線上で距離は遠いんですが、年齢もすごい違うんですけど、気持ちが伝わるような素敵な発言ができたこと、私も同じ思いですということを伝えたいと思いました。

(Bさんと共に活動してきた年月に思いを馳せながら)私は、Bが中学2年生の時に彼女がいた中学校に赴任したんですが、だから、中学2年生、3年生と彼女と一緒に、解放未来塾と学校生活と両方で一緒に学ぶことができたという仲間なんですけど、私たちは、人権学習で同和問題以外のことでも、いろいろなところに勉強をしに行くんですが、教科書無償運動のことを学びに高知県に行った時に、その隣保館で館長さんにいろいろお話を聞きました。

その時、私たちのところ(愛南町解放未来塾)のほとんどの子が、自己紹介で学年と名前を言うというのが精一杯で、気持ちとか想いとかをなかなか述べることができませんでした。それで、私たちは帰って来て、先ず、マイクを持つ練習を子どもたちにさせようということで、私たちの集まる隣保館は狭い所なんですけど、しゃべる時にはマイクを持つところから始めていきました。

その時に、「現地研修に行った後の報告会をしたら」ということを、Bと先輩の2人が言いました。それまで、研修に行ったその後、みんなに報告して伝えるという作業を自分たちだけでしたことがなかったので、実際はすごく大変な作業でした。放課後、ほとんど毎日私のところに来て、一緒に作っていったんですけど、書くとなるとなかなか書けないんですね。会話している時に、「あの時、こうだったよね」というのは結構覚えているんですが、言葉をつないでいくこと、自分の思いを表現していく作業は、私にとってはすごく楽しい作業だったんですけど、本人にとってはしんどかったかもしれません。

(うれしそうに言葉を詰まらせながら)できあがった時に、「やったー！！私の中でこんなに頑張ったことないで…」っていうその笑顔が忘れられないんですね。しんどかったんでしょうけど、最後までやり切ったというよろこびがあったんじゃないかなと思います。そういう学びの中で、彼女は父親とか、解放未来塾の仲間、先生方とか、そういう人たちに自分はいっぱい支えられて、少しずつ気づき始めて、気づいたことによって、彼女は、今後自分が地元で父親を支えたい、未来塾をみんなと共に支えていきたいと思ったんだと思います。そして、介護の道に進みましたので、周りの大人たちも支えていきたいという気持ちもあったんじゃないのかなと思います。

彼女を見ていると、やっぱり、学んだこと、みんなと共に人とふれあって、学んでつながって、いろんなことに気づいて、そして、気づきの中から自分がどうしようか、自分がどういう道に進もうかということを見つけたというか、そういうことが素晴らしいんだということを、彼女を通して、私は改めて確認させてもらったというか、今から、彼女は指導者の方の立場に立つんですけど、年が一番近い、指導者と子どもたちの両方の立場が分かるということで、私たちのパイプ役として一緒に歩んでくれることをすごくうれしく思っています。以上です。(拍手)

《コーディネーター A》

(一言一言に思いを込めて)今、中学生がしゃべりましたけど、舞台を経験することによって、言葉が出る

ようになりました。私は「人権を語り合う中学生集会」に毎年参加していますが、昨年の「人権を語り合う中学生集会」と今年の「人権を語り合う中学生集会」での姿は、全く別の存在です。ここまで変わるか、ここまで成長するかと思うくらい変わります。

現実には切ないです。だからこそ歩き続けていく。卑屈に生きるのではなくて、周りに伝えながらも、自分に何ができるかを問い続けていく。そんな歩き方が私たちを幸せにしていくんだと思います。言葉の力をかみしめながら、仲間に語り、仲間の思いを聞く。そんな語り合いの中で、私たちは成長していくんだと思います。

高校時代の仲間たちの姿、Bちゃんの未来塾での、フォーラムでの姿。共に全体学習をつくっていったD先生が、先生自身のことを中学生に語っている言葉。そんな言葉の力を大事にしながら、自分に何が問われているかということ語っていく。自分自身を発信していく。そんな人権学習でありたいし、人権啓発でありたいなと思います。

いろんな思いをお持ちの方や、いろんな価値観があろうかと思います。いろんな思いを発信してください。どうぞ。はい。いきましょうか。

《フロア N》

(ニコニコしながらマイクを受け取り立ち上がる)神奈川県藤沢市からまたここへ来ることができました。今日もパネリストの話を伺う中で、厳しい差別の現実の話を聞いて、Cさんがいつも差別に向かっていく、なおかつそこにいつも仲間がいる。それをいつもすごいなあと思います。それから、D先生の小説ですが、A先生から聞いて、(うれしそうに満面の笑みで)神奈川の書店に注文してさっそく読みました。これは正直な感想ですが、私はちょっと年上で男性だから、高校時代こういうことあるよなという、正直言って、いわゆる青春小説としてしか私には読めなかったんです。

今日、出版に関わる経緯とかを聞いて…。たくさん買えないので回し読みしたんだけど、感想を聞くと「わかんない」っていうんですね。あの本を出発点として、我々は読んでいったらいいんだけど、神奈川県での人権学習っていうのはまたちょっと違うし、同和問題というのはほとんど関わっていないし、でも、そういう現実の中でも、「よかった」って2人ほど、言ってくれました。

(照れくさそうに)今日も、発表しないと言いながら手を挙げてしまいました。(会場から笑い)また来年も来られたらいいなと思っています。私としては、今回、社会教育の指導主事として仕事している仲間に、「鳴門はいいよ。来た方がいいよ」と何度も言ってきたけど、これまで誰も連れて来られなかったんだけど、今回1人一緒に来てくれたので、そうやって広がっていくと、神奈川県の人権担当の人も「頑張っているなあ」ということで、広がっていくといいなと思います。(拍手)

《コーディネーター A》

(フロアのNさんに応えるように、ニコニコと)D先生、継続は力なりです。一言お願いします。

《パネリスト D》

いろんな感想をいただくんです。正直言って、「何も伝わってこない」という感想があったことも事実です。これは、私の文の力の至らなさによるところだと思うんですが、(じっくりと思いを込めて)実は、読まれた方はピンとくると思うんですが、ストーリーから言うと、福島県をメインとして書きました。原発の避難をイメージして書きました。書いた当初、原文には「津波」という言葉を2か所入れていたんです。ところが、編集の最中に「ここは書き換えてほしい」と言われたんです。まだ、原発による事故は終息していない。非常に厳しい思いをされている避難者の方もたくさんいる。あの時の震災や津波のことをフラッシュバ

ックされる方もおいでと思うので、できるならば「津波」という言葉は避けてほしいと言われました。

「ああ、これが大手の出版業界か」と思いました。「そんなことならやめてやる！」というのも手ですが、でも、違う言葉に置きかえてでも、何か人に伝わることがあるならば、出版するという道を選んでもいいのかなと思って、出版をするに至りました。

その前の段階で言えば、部落差別を扱った小説が書きたかったし、それも言いました。それも、大手の出版社においては、「部落差別、同和問題については、非常にナイーブな問題であって、誤解を受ける、あるいは与える可能性が強いので、当社としては出版できない」という返事でした。ああ、これが現実かと思いました。

一度は、それでくじけたんですけど、「もういいや、もう本なんか出版するか」と思ったんですが、小西さんという方からご連絡いただいて、「部落差別、部落問題については、当社では出版できないんだけど、何か別のテーマを扱ったものを書かれるのであればやらせてください。」そう言われたのが、去年の7月でした。

それで、どうしようか迷ったんですが、国語「3」ですからね。(照れくさそうな表情に、会場に温かい笑いがこぼれる)国語「3」の人間が文章を書いてはたして小説になるのか。そんな思いの中で無理だと思いながら書いた小説です。そして、9月の初めに仕上がるわけですが、そういう経緯がありながら、でも、何か残せるものがあるならば、誰かにひっかかるのであれば、それは意味のあることかなと思ったんです。

(切々と語りかけるように)本の中に主人公が2人出てきます。男の子は全く人権には無関心なんです。女の子も別に人権という言葉に特別な受け止めをしている子ではないんです。ただ、女の子の境遇が「人権」というキーワードがひっかかってきちゃった。彼女に恋心を抱いた主人公の男の子にも、「人権」という言葉は一切ないんです。ただ、彼女に恋心を抱いたがゆえに、「人権」というキーワードがひっかかってきた。それでいいんじゃないかなと思うんです。難しい知識も必要なかもしれないんだけど、そんな難しいことは置いといても、感性の部分にひっかかりさえすれば、それでいいんじゃないかなと思うんです。

(発言したKさんの思いに答えるように)今回、「人権を語り合う中学生交流集会」で、応神中学校の生徒も参加しましたが、藍住中学校のみんなと離れるのが嫌だったって言うんです。1日、2日の出会いです。でも、思い出してください。私たちの若い時にもあったと思うんです。今も若いけど…。(会場から笑い)1日2日の出会いで離れたくないって、思うことってあったと思うんです。子どもの頃に…。そこに救われたんです。

応神中学校の生徒は、中学生集会に行き、藍住中学校の生徒たちと出会って、やり取りをする中で変わっていったのかもしれない。私は応神中学校に帰って来て1年目だから、去年そこにいなかったからわからないんですが、応神中学校の子どもたちはそう言っていました。多分キーワードとして、「人権」というものがひっかかったんだと思います。そういう感性を、私は子どもたちに持たせてみたいと思います。終わります。

《コーディネーター A》

(想いを受け止め、温かいまなざしでゆっくりと)素直に語る言葉というのは、本当に心に染みていきます。これは大人も子どもも同じだと思うんです。教師が子どもたちに真っ直ぐに伝える素直な言葉。精一杯の言葉。それがやっぱり心に染みていきます。

人権啓発の場で、さまざまな研修の中で、住民の方と、集まっておいでの方と意見交換をした。素直に自分自身を伝えるその言葉が、スッと心に染みていく。その染みたことがその人の思いを引き出していく。語り語り語りを生んでいく中で世界が変わってくる。これがこの学習のよろこびだと思うんです。

「人権を語り合う中学生交流集会」にずっと関わってきましたけど、これほど発言が続いた、5人も6人

もずっと手が挙がり続けた、手を挙げようと、発言の機会がなかなかない。その語りが自分自身の事実を語る。だから、次々に想いが溢れていく。

それはやっぱり、素直に自分を表現するよろこびを一人ひとりが見つんだからです。その舞台を自分のものにしたからです。やっぱり、心で伝えてなんぼだと思うんです。本気で聞いてなんぼだと思うんです。

そうになったら他人のせいにしません。他人の悪口がスッと引いていきます。楽になります。自分に何ができるかということ問い続けていく。そんな人生でありたいと思います。限られた時間です。できるだけ多くの方、マイクを握ってください。はい、いきましょう。

《フロア M》

鳥取県から来ましたMと言います。Sさんにつながって、5回目のフォーラムに参加させていただきました。去年も来たかったんですけど、家族のことがありまして、来れませんでした。でも、今年はSさんから連絡いただいて、その後、綿密に策を練りまして、文句の出ないようにしてやってきました。

(一生懸命に言葉を紡ぎながら)Sさんから初めてご主人のことも聞きまして、彼女もしんどい中から参加しているんだということを、はじめて知りました。それまでは、どんどん自分を発信していかれる方だと思って、そのバイタリティに感心させてもらっていました。今回、彼女もずっと来れるかどうかかわからないと言っておりましたが、私も、そういう中でA先生に出会えて、北栄町の教育委員会におりました時に、A先生に講演をしていただきまして、たくさんの人に力を伝えられたなっていう、仕掛人として誇りを持っています。それがここに来させた大きな力です。

素直に自分の気持ちを語りたと思って、ここだと安心して語れるので、絶対に発信して帰りたいと思うんですけど、私が発信するものというのは、自分でやってきたことっていうよりは、これからしていかなければ課題です。

(思いを込めながら)私は、93歳になります認知症の義母をもっておりまして、とても元気です。プライドの非常に高い人で、頭も結構切れます。何をやっても他人に負けることはないと思っている人間です。それでも、今言ったことは忘れます。何十年前のことは正確に覚えていまして、それで対応しますので、話をして負けるということのない人です。そこの中で互いの想いがぶつかって、日々闘いの中で暮らしています。

なるべく穏やかに生きていきたいと思っておりますが、「親子はどんなことを言ってもいいです。でも、お嫁さんは気をつけてください。もし腹が立ったたら、その場を逃げなさい。」と言われました。段々とエスカレートしますと、DVということが現実に見えてきます。夫に「どんなに言ってもいいけど、手だけは出したらいけんよ」と言います。でも、夫とのやり取りを聞いていると、本当に情けないけど、自分が嫌になるようなことをものすごく思ってしまう。

「地獄を駆け巡る」というのもこういうことかもしれないなと思いながら過ごしています。ここに来て、皆さんの語りを聞いて、他人を大事にできるような気持ちになりたいなと思ってきました。

(うれしそうに)中学生の方の語りや、Cさんの厳しい現実や、Bちゃんのすばらしい発表を聞き、3年間未来塾の塾長をして、今度は介護の形でそれを生かしていこうとされる姿は、すごく勉強になります。私もそれを見習っていききたいなと思います。

私の友人であり、Sさんの親友が、私に言ってくださった言葉を最後にしたいなと思います。「Mさん、悩みがないことが幸せじゃないんだよ。悩みに打ち勝つ力を持つことが幸せなんだよ。耐えられるなら我慢されたらいいわ。でも、耐えられないのなら、自分の気持ちを言っていかれたらいいわ。」そう言ってくださったです。そして、「人を変えていくのは、決して権力じゃないよ。理論でもないよ。天才でもないし秀才でもない。思いを持ったその人のエネルギーが人を変えていくからね。」そう言われた言葉は、私が第一歩を歩めた大きな言葉です。それを常に生活の中で語りながら、頑張っていきたいなと思ってこさせてもら

いました。

(しみじみと)退職して5年になろうとしております。私が残せたものって、何かと考える年になりまして、小さなことしか言えませんが、自分の言ったことに嘘のない生き方をしたいと思ってきました。これからも、それは貫いていきたいなと思っています。また、どこでお会いできるかわかりませんが、今度は「ここだから言える」ではなく、「どこからでも、自分の今の気持ちを発信していけるように生きていきたい」と思います。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

(フロアを見渡しながらいかがでしょうか？どなたか。(最前列中央から手の挙がった男性に発言を促す)

《フロア H》

(うれしそうに笑顔で立ち上がり、フロアを向いて)では、私が…。なんか、前の方ばかりですみません。(フロアで語って中学生に向かって)Kさん、偉いですね。あなたを見習って、前の方に後ろを向けてしまいますので、私もこちらから話します。

(自分の椅子の前で後ろを向いていた位置から、スクリーン側に身体を移動し、パネリストへの気遣いをしながらゆっくりと語り始める)私も、昨晚、神奈川県からやってまいりました。東京の新宿という所から出るバスで、どういう経路が一番安いかと探しまして、6500円の夜行バスに乗ってきましたので、今日は6500円分は語って帰らなければならないと思っています。

(会場から温かい笑いが起こる。その笑いを楽しむように)神奈川県というところはですね、そんなに同和教育は盛んには行われていません。私も、自分が中学生の時に、そういう同和地区とかいう話を聞いた時には、「そんなこと言わなければいいじゃないか。言わなければ知らないんだから、今まで通り仲良くしていけるじゃないか。」そういう考えを持ちました。

今、社会教育主事となって、人権もやる機会はあるんですが…。話は変わりますが、教員の仲間が、神奈川県は結構いろんな県外から来られて、「よそ者扱いされないところがすごくいいよ」なんて言われ方をするんですが、逆に人権教育を進めるのに、非常に壁が高いというか、あまり難しい話をする、ここにこんなに人が集まるのが驚くくらい、人を集めるのが大変な現状があります。

(楽しそうに生き生きと)そんな現状がありますので、僕が悩んでいる時に、今日、私をここに招いてくれたN先生が、「こんな資料があるよ」と言って、1年半くらい前に紹介されたのが、A先生が全体学習で語られている場面のビデオでした。ちょうど1年くらい前ですが、柔道の全国大会があってA先生が中学生を引き連れて、神奈川県に来られまして、その折に初めてお会いしたんです。

その時、全体学習のお話を熱く語ってくださるんです。「僕ら教師が本音で語ると、子どもたちは本当に自分の悩みを出してくるんだよ。あんなに愛おしい子どもたちの姿はない」というような話をされるんです。そうすると、私は、社会教育主事をする前は教師でしたが、「それだけ自分のことを語ってきたことがあったかなあ」とか、「それだけ子どもたちのことを愛おしく思ってきたかな」という思いが湧きあがってきて、何も言えなくなってしまうんです。

A先生のすごさっていうか、その熱い思いに感動して、その晩はお別れしたんですが、今回、ここへ来るにあたってですね、(カバンの中から1冊の冊子を取り出しながら)N先生が、読むようになって渡してくれたのが、先ほど先頭に手を挙げて発言されたSさんっていう方が作られた、「私への応援歌」という冊子なんです。(パネリストや前の方で明るい笑いが漏れる)Sさんは、こういうフォーラムとか講演会に参加されて、学んできたことをまとめられたものなんですけど、これを1週間くらい前に、N先生から頂きまして、Sさんとお会いする前に読ませていただきました。

そこには、「私は普通の人なんです。ただただ活発に動いているだけなんです。そんなに難しいことを考えないで、思ったことを行動していったらいいんじゃないですか。」というような、人権教育に対する思いが書かれていて、それを読みながら、ここへ来るのに肩肘張らなくていいかなと思っていました。

そうしたら、これを送ってくださった次の日に、もう一つ、N先生から、これ(小説「ペットボトル・マジック (P. M)」)をいただきまして、(取り出された資料に会場が明るい笑いに包まれる)この小説を読んで今日参加しております。

これからどういう関わり合いになるかわからないんですけど、皆さん、こうして続けていられることが、すごく素晴らしいことなんだなと思っていますところ。人権教育を進める立場になったときに、みんなが、自分のこととして、自分の幸せを求めている。その自分自身がどうしたらいいかなって言った時に、最初に全体学習の場で、「本気になって、本当のことを語るんだよ」って言ったA先生の思いや、そういった思いを引き出していけるような積み重ねを大事にしていきたいなと、今、思っているところです。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

(ゆっくりと力強く)大半の人たちが同和問題は遠くのことです。ひとごとです。一生懸命思いを伝えた時に、「ひとごと」の言葉が返ってくるとしんどくなります。なかなか心に染みていきません。そういう現実があります。だからこそ、私たち自身、私自身が問われていくんだと思います。

現実には厳しいです。厳しいからこそ、強くなれるし、豊かになれるし、本当の自分が生まれてくるんだと思います。歩き続けていくよろこびです。人権を掲げた研修会には、人がなかなか集まりません。ノルマでないと人を集めることが難しい現実があります。そんなノルマの研修は、切ないし、終わった瞬間、その学習が全然生きない。切ないものが溢れます。大人の世界にも、中学生が語ったような切ない現実があります。だからこそ、やっぱりつながりだと思えます。関係だと思えます。つくり続けていくんです。

人が変わるかどうかは人の勝手です。でも、その人を通して私が変わります。私が幸せになります。それが、この教育のよろこびだと思えます。昨年11月に、藍住中学校で全体学習がありました。その時、切ない現実を語って語っていった子どもたちの姿を心の底から愛おしいと思いました。その授業が終わった時に、抱き合っている子どもたちの姿、涙をボロボロこぼしている子どもたちの姿、担任の姿が、やっぱりまぶしいです。「この子らの幸せを」と心の底から思います。自分にできることを精一杯やっつけていこうと思います。そういう思いにしてくれる教育だと思えます。

(じっくりと)地元の人が、マイクを握って自分のことを自分の言葉で話すということは、相当なエネルギーがいります。でも、そういうことが安心してできる、そういう関係ができた時に、人権教育っていうのは、人権啓発っていうのは、大きなよろこびになるんです。関心を持つことです。身近なところで語ることです。そんな語り合いができたらうれしいなと思います。後、お1人かお2人です。どなたか。はいいきましょう。

《フロア O》

香川県の小豆島町から来ましたOです。(パネリストのBさんに思いを返し、自分自身にも問いかけるように)今日は、同年代のBさんの発表を聞いて、やっぱり、地元でもっと後輩に伝えられるような活動をできているとか考えていたら、まだまだ自分のためにしか活動してないし、後輩に伝えられるという力もないけど、こういう「フォーラム」とか「愛南町のふおーらむ」にも参加させてもらって、同年代の方ともっと出会って話して、ちょっとずつだけでもできているかなと思っています。地元に戻って報告会ができたらいかなと思って聞いていました。今日はありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

後一人、どうぞ。

《フロア K》

香川県から来ましたKです。私は学習会の世話をさせてもらっています。今日はそのメンバーと、お家の方と4人で来させていただきました。今日、ここに来て、私が彼女たちに伝えたいのは、「胸を張って生きなさい」ということだと思っています。

彼女たち、胸を張って生きている時もありますし、いろんな波があります。ここに来たことで、こういうふうな会で学習をして、胸を張って生きていてもらいたいと思っています。今日は、生徒たちと来られたのは、本当によかったと思っています。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

もうよろしいですか？(前の席から手が拳がった男性に笑顔で)はい、最後にいきましようか。

《フロア I》

(照れくさそうな中にも力強く)失礼します。阿波中学校のIと言います。この鳴門のフォーラムに参加して6年目になります。実は、私は前の前の学校の時に、自分が教員として採用された3年間でA先生と一緒に仕事をさせてもらいました。A先生の指導のもと、今の自分があるんですけど、今回この会の参加が6回目になるんですけど、過去の初めの3回というのは、話を聞くことは大事なことだと思うんですけど、なかなかこういう場で発表するっていうことができませんでした。

でも、前々回、前回、今回ということで、パネリストの方や横の席の鳥取のSさんの熱い気持ちから、私自身も自分の中で、一步一步ステップを踏み出していくように、発言しようかなと思って、最後に手を挙げさせていただきました。

今日、3名の方が話をしてくださって、まず、Bさんの話の中で、今の自分にできることをしていきたいという思いを、ご自身の家族の話と絡めて話してくれました。僕自身、嫁さんも子どもも含めて8人で暮らしていますが、最近、自分のおばあさんの方が、元気なんですけど、具合が悪くなったこともありまして、Bさんの話が、僕の中で固まって、僕の心に響くというか、勇気がわいてきたというか、自分の家族のことに置き換えながら話を聞いたんですけども、すごく勇気がわいてきました。ありがとうございました。

Cさんの話なんですけど、私も子どもが、昨年10月に1人できて、3人の子どもの父親です。Cさんが今日おっしゃった「親の幸せは子どもの幸せ」という言葉が、すごく僕の心の中で納得ができて、僕自身もそんなふうに分かる子どもと関わっていくかって言ったら、そうではありません。改めて、3人の子どもたちといられる時間を大切にしたいし、その3人の子どもが幸せに生きていけるような、親としての務めを果たしていきたいと思いました。ありがとうございました。

D先生とは、実は私は、今年から学校が変わりまして、初めてサッカー部の顧問をしていますので、D先生とは、こういう人権の研修の場で会うというよりは、グラウンドで実は会うことの方が多いです。そのことに自分の中ですごく驚いています。

この、D先生の本で言っている「子どもたちにしか書けない文章」僕もよく、道徳とか人権の授業の中で、子どもたちに文章を書かせています。その文章の一つ一つを見て、子ども一人一人にしか書けないような文章を大切にできているかということ、実をいうと自信のない自分がいます。

今日改めて聞いて、教師として、今、私は阿波中学校にいますので、阿波中学校の目の前の子どもたちを大切にしていかなければいけないという気持ちが強くなりました。ちょっと走り走りだったんですけど、3名

の方のお話を聞けて、どうもありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

アッという間の3時間です。本当にありがとうございました。本当にお疲れだと思います。自分のことを自分の言葉で語る。やっぱりすごい世界だと思います。「今、ここ」を語る。「今、ここ」を伝える。「遠くのこと」でなく、「ひとごと」でなく、自分を語る。そういう繰り返しが、その人自身を幸せにしていくなだと思います。

最後に3人の言葉で、この会を閉めたいと思います。最後に、愛南町の仲間が、『私たちの合言葉』を披露してくれます。愛南町から声楽の専門家が来ていますので、期待してください。よろしくお願いします。じゃあ、D先生から。

《パネリスト D》

9年前に「同和対策地区学習会」の制度がなくなりました。「同和対策地区学習会」がなくなって「中学生友の会」という名前が変わって、今に来ているんですけども、いつかBさんのような地元の子どもが育ってほしいと、ずっと、本当にずっと思ってきました。

今年、教育実習に卒業生がやって来て、すごくうれしかった。中学生友の会に関わってくれて、教育実習もしてくれた。だから、本当に地元の子どもを地元の若者が見るという形です。本当に理想です。自分の住んでいる町もそうありたいと、Bさんを見て思います。

中学生友の会、高校生友の会を(午後)7時半から9時までやっています。ありがたいことにその時間、僕は家にいません。いないことが私の家族にとっていいのか悪いのか、それはわかりませんが、うちの子どもたちは、私が何をしよるのかわからんけれど、僕が、中学生友の会や高校生友の会に行っていることだけは知っています。

9時過ぎか9時半頃、家に帰ってみると、机に向かって勉強しよるんです。それがありがたいです。僕は、直接、我が子の勉強を教えることもありますが、でも、そうじゃなくて、父ちゃんおらんけど、どこかへ行って、そこで中学生や高校生が勉強しているんやなあ。そう思って、自分たちも机に向かって勉強してあげていたら、僕が見るんじゃなくて、どこか知らないところの中学生や高校生が、うちの子どもたちの勉強を見てくれているということです。そう思います。だからすごくありがたい。

そんな町や、そんな町の関係やつながりっていうのも、これからの日本という社会でつくっていける人になっていけたらなあと思います。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

《パネリスト C》

皆さん、今日はありがとうございました。せっかくですから、藍住中学校の発表してくれた人はなんていう名前ですか?(コーディネーターから「Kです。」と笑顔で声がかかる)下の名前は何かですか?(本人から「Nです」と声が返る。その声に応えるようにゆっくりと、言葉を大事にしながら)Nちゃん、Nちゃんが一生懸命話ってくれて、周りを変えたい、仲間に分かってほしい、友だちになってほしいっていう、本当の意味でつながっていきたいっていうのがよおわかる。それは、大人の社会も一緒に、大人になっても、それが言えんのはよおけるんよな。ここでA先生の教え子のT君が、自分の会社の現実を語ったけど、それはごく一部の人しか言えん。

今日、Nちゃんの話聞きながら、ずっと時代は繰り返されよるなと思いました。僕らもそうだったんです。今日、僕の話の時にDVDで紹介した僕の友だち、彼は香川県の高松高専の卒業生です。僕らが、よく、「わかってくれん」とか「授業が面白くない」とか、「高校に行ったら人権教育の授業は、年間5時間くら

いしかないんよな…。」そんなことや先生の愚痴とか言うと、「年間、5時間だけでもあるだけでもいいと思え…。先生は学校の勉強を教えるのはプロやけど、人権学習はみんな素人や…。先生の悪口言わんと、先生の背中を押していくような、先生を育てていくような、そんな、一緒に手を組んで仲間としてやっていけ…。」彼はそう言ってくれた。

彼のすごいところは、何の興味もない友だちを香川県から連れてくるんです。家に泊まれって言って、うちに泊まって一緒に友の会に行っただけです。「一人ずつ変わったらええけん」と言って…。昨日変わらなかった人間が、一人変わっただけでいい。全員を変えようと思ったら無理だから…。この活動をやりよって僕が思うのは、A先生もD先生も変わるとるよ。はっきり言って、友だちあんまりおらへん。(会場から明るい笑いが起こる)でもな、好きな人は滅茶苦茶好きなんよ。僕らの友だちはぜったい裏切らない。何があっても…。

一人ずつ、昨日変わらなかった人が変わっただけでもよろこべるような、そういう人権学習っていうか、本当の意味での仲間をつくっていったら、それが良いんじゃないかと思います。

最後に、僕が話をしたいのは、僕の話ではないんです。皆さん、いつも(妻の)Hちゃんの話をするんですけど、Hちゃんが香川県の病院で働いているんです。そこには去年の6月から育児休暇を1年取って、今、復帰しています。

両親が、去年の3月に2世帯住宅を建てたんですが、母親が、3月に急性骨髄性白血病と診断されて、「何にもしなければ1か月以内に亡くなりますよ」と医者に言われました。でも、いろんな抗癌剤治療とか受けて、「ばあちゃん、早く家に帰って来てよ！」その孫の言葉が力になって、今、退院して家で元気にやっています。実は、うちのHちゃんがそれを聞いた時に、すぐに自分の病院に電話をしてくれました。

彼女は、3番目の子どもの「満愛」が生まれる時に、彼女の勤めている病院の中で一つの闘いがあったんです。それは、皆さんからいうと小さい闘いかもわからんけど、「満愛」が生まれる3か月前のことです。お腹が大きくなって、もう来週から産休に入ります、そんな時でした。

自分のごっつい尊敬しとるしっかりした先輩が、看護師の方と食堂でご飯を食べよって、「私な、子どもが今度小学校に上がるんやけど、どうも高松の方の住宅の子と友だちになったんよ。でもな、あそこの人らはうわさで聞いたんやけど、どこかの家をつぶしたらしいし、友だちはやっぱり考えてほしいよな」って、うちのHちゃんにボソッて言ったんです。

香川の人はよくわかると思うんですが、大きな被差別部落のある所です。その中で、いつもはHちゃんは、その先輩に対して怖いなあと思っていて、「そうですね」って答えるんやけど、その日は、「いや、そんなことはないと思いますよ。良い人もいれば悪い人もと思いますよ。」と言うと、その先輩はスッと聞き流します。

Hちゃんは、そう言ってからご飯を食べて、スッと出て行った時に、その先輩は、スッと入ってきた別の仲間にも同じことを言っているんです。Hちゃんは、それを聞いた時に、このままにしておいたらまずいなと思って、その時に何をしたか。その後すぐに産休に入ったんですけど、実は、手紙をその先輩に書いたんです。

原稿用紙4枚ほど、私たちの闘いのことを一生懸命書いて送りました。実をいうとその先輩から、メールでHちゃん宛てに返信がありました。そのメールもここでご紹介します。

「お仕事お疲れ様でした。赤ちゃんと二人三脚の勤務は、大変なことがたくさんあったと思うけど、いつも穏やかでお仕事をこなされているCさんの姿勢に、教えてもらうことがたくさんあります。私自身、仕事が生んどく感じている時に、朝一番に聞いてもらえたことが、かなり大きかったです。ありがとう。

先日は、何も考えずに口にしてしまったことが、Cさんやご主人さんを深く傷つけてしまっただごめんなさい。何よりも、心からの手が必要な時期に、心を痛める思いをさせてしまいましたね。私自身、何も知らな

いまま、世間の噂だけで気持ちを揺らされていたのは事実。親として我が子には幸せであってほしいという、そこだけの勝手な思いで、学校でも社会でも、明確なこと、明快な詳細は、誰も教えてくれず、ただ偏見と噂だけが耳に入る。なぜそうなり、何が問題でどうするべきなのかはわからないのが本当のところですよ。

私の周りにも、悲しいことですが、そんな人が多いようです。ただ噂だけで、知りもせず近づくなというのは、人間として自分の意識の方がどうかということだよ。

先日お話ししたお友だちに会う機会がありました。誰より挨拶がきちんとでき、振舞いにも思いやりのある素敵な女の子です。もちろん二人はすぐに親友になりました。

(涙が溢れ、声を詰まらせながら)その後、毎日心の中でごめんねと謝りながら、恥ずかしいような情けないような複雑な気持ちでいました。(涙で顔をクシャクシャにしながら、精一杯の思いで読み進めていく)ご苦労され、努力してこられたご主人さんやCさんに申し訳なかったです。大切なお手紙をありがとう。私自身の生き方として、大切に考えます。1年間、ご家族とゆっくり過ごして、また元気に仕事に来られるようなパワーを充電してください。ありがとう。

私の人生の中で初めて深く考える機会になりました。全くなんの意識もなく生きてきたんだなあと感じました。人にはそれぞれ生きていく場所や課題があると思うけれど、自分にとって相手の存在がどうかというシンプルなところが大切。知らず知らずに、無意識のどこかにある寂しい偏見の存在をなくすためには、無意識ではなく、意識することやね。私なんか想像つかない深い大切な問題がたくさんあることと思いますが、Cさんとご主人さんには、神様に選ばれた大切な役目があるんだと思います。実際、私は大切な機会をいただきました。ありがとう。可愛いHスマイルを受け継いだ、赤ちゃんの誕生を楽しみにしています。」

(生き生きとうれしそうに)皆さん、Hちゃんは、のろけ話ではないけど、そこで直接何かを言うのではなくて、手紙でそのことを伝えて、自分の魂を込めて、自分の結婚の時の話を、そばに先輩がいるような気持ちで伝えました。そのことが、無意識の先輩の意識を変えていく。

やっぱり、僕は、地区外の人から学ぶことがたくさんあります。Hちゃんの成長を僕はびっくりしながら、いつも毎日見ているので、今日も働いていて、今日は僕は1人で来たんですが、3人の子どもの母親として立派な素晴らしいお母さんになっています。その報告で終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

《パネリスト B》

(少し緊張しながら)今日はありがとうございました。最後に、さっきA先生とCさんが言ってくれた解放未来塾の歌『私たちの合言葉』について話したいと思います。この歌は、未来塾の塾生一人一人が「自分がどうしても入れたい」という言葉をつなげて作った歌です。歌詞は私が作りました。このタイトルにもあるように、この歌は未来塾そのものを表しています。

春は、開講式で出会った仲間との絆の強さ。冬は雪が降っていて、卒業する仲間もいるんですけど、また、冬に出会った仲間との大切な絆について作っていて…。(うれしそうに元気よく)最後に愛南町の仲間が、H先生(城辺中学校音楽教師)がマイクを持ってきれいな声で歌ってくれると思うので、皆さんも歌えたら一緒に歌ってくれるとうれしいです。今日はありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

すごく、耳に残って歌いやすい歌です。じゃあ、H先生、前に出てください。どうぞ、愛南町の皆さんも前に出てください。手話コーラスもあります。(みんなでワイワイ言いながら、和やかな空気の中で歌の準備が進む。愛南町からは、解放未来塾の塾生を含めたくさんの未来塾に関わる大人も楽しそうに前に並ぶ。その中にはパネリストのCさんやフロアからの参加者の姿もある)

「私たちの合言葉」～僕らのノンフィクション～

作詞 2009 未来塾塾生・指導者

作曲 秋本良次 編曲 土居俊一

あの春に出逢えた仲間
絆はかたく結ばれて
永遠(とわ)の約束した日から
いつも笑顔であふれてる
時には壁にぶつかって
とまどうこともあるけれど
未来を信じ勇気を出せば
今を生き抜く力に変わる
さあ 一緒に描き続けよう
やさしい花咲く 明るいあした
がんばらない あきらめない
夢を捨てない
それが私たちの合言葉

あの冬に出逢えた仲間
心は広く温かく
思いやりの輪がつながって
厳しい冬を溶かしてく
時には孤独につぶされて
涙する日もあるけれど
扉を開き その手のばせば
未来は希望に満ちていくから
さあ 一緒に歩み続けよう
ありがとうの歌 響かせながら
がんばらない あきらめない
夢を捨てない
それが私たちの合言葉

《コーディネーター A》

(しみじみと)3時間の中に、私たちの中に広がった絆を大事にしながら、自分に何ができるかということ
を問う。最後に、C君がHちゃんの誠実な闘いを語ってくれました。精一杯の思いが伝わった時に、込み上
げる感動があります。(力強く、一言一言に魂を込めながら)なかなか厳しい現実があります。残酷な言葉に
出会います。でも、自分をずっと見つめ直して、私に何ができるかということ問いながら、精一杯のメッ
セージを届けていく。その中で、私たちの幸せはあるんだと思います。

多くの人がマイクを握って語ってくれました。それはやっぱり、この会場で一生懸命聞いていただく皆さ
んのまなざしが、大きな力を生んでいくんだと思います。日常はやっぱり切ないです。家族の現実、みん
なそれぞれ違います。だからこそ、心通わせていく。自分の精一杯を伝えていく。そんな営みを大事にして
いきたいと思います。暑い夏なんですけど、それ以上に熱いものが、私たちの中に広がった3時間でした。
私に何ができるか。私たちに何ができるか。そのことを問いながら頑張っていきたいと思います。本当にあ
りがとうございました。これでフォーラムを終わらせていただきます。

<拍手で終了>